

■可能性の総体としての空間について／野矢 茂樹 ■武者小路実篤とウィリアム・ブレイク——共生と競争の狭間で／佐藤 光 ■『近代戯曲発展史』から『小説の理論』へ——初期ルカーチの文学理論に見られる歴史哲学の構図—(下)／高橋 宗五 ■鐘になった娘——ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』を読む／川澄 亜岐子 ■在原業平「月やあらぬ」歌再考／田村 隆 ■明治大正期日本のアート・ドキュメンテーション——美術批評家・岩村透による国内外美術情報の構築とその思想(上)／今橋 映子

前号目次

編集後記

『超域文化科学紀要』第23号をお届けします。本号の表紙と中表紙・裏表紙には、駒場博物館が所蔵する、タマサイ(玉飾り、首飾り)とニンカリ(耳飾り)と呼ばれるアイヌ女性の使った装身具を用いました。初代教養学部長矢内原忠雄先生の発案によって、1951年に現・駒場博物館の前身である美術博物館が設置されますが、このアイヌ民族資料は、本学学生の教養教育に資することを目的として、東洋考古学がご専門であった三上次男先生によって1959年11月19日に購入されたものです。江戸時代に使用されたものと推定されています。

大小のガラス玉を連ね、真鍮製の飾り金具がつけたタマサイは、古いものは大陸から山丹交易によってもたらされた青玉を連ねただけでしたが、本州でつくられたトンボ玉と呼ばれる色玉が加わるようになると、色彩が一層豊かになったとされています。本学の当該資料は、異なる複数種類のトンボ玉であしらわれ、色彩が実に豊かです。また大玉だけで構成されていて、全長は50センチメートルあります。表紙でズームアップした金属の飾り板は、一般にシトキと呼ばれますが、玉だけが連なったものとは違い、祭祀(宗教儀式)のときに用いられたものと推定され、母から娘へと継承される貴重な財産でもありました。

大陸からも物資がたらされる山丹交易は、近世に、山丹人と呼ばれていた、主にウィルタヤ、ニヅヒ、オロチョンなど沿海州の民族と、アイヌとの間で主にサハリンを中継地として行われた交易のことです。ひとつの資料に基づき、それを注意深く観察、考察させることで、多方面に視野や見識を広げるといふ、教養教育に資するという目標は、十分に達せられた逸品かと思います。皆様もじっくりと鑑賞されると、新たな発見があることでしょう。画像の使用にあたっては、駒場博物館の折茂克哉先生にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

(M. I.)